２０２５年２月２日（日）　　於札幌発寒教会

「既に」と「未だ」の間に生きる

（ルカによる福音書１７：２０～３７、ハバクク書２：１～４）

今朝は、ルカによる福音書１７章２０節から３７節までの、新共同訳聖書では、「神の国が来る」と言う、小見出しがついた個所が、説教のテキストになります。小見出しが、この個所の内容を的確に言い表しているように、ここには、神の国を巡って、主イエスとファリサイ派の人々との間に交わされた問答が、また、主イエスが弟子たちとの間に交わされた問答が、否、彼らの場合には、問答と言うよりも、勧め、警告が、語られます。問答のきっかけは、ファリサイ派の人々が、「神の国はいつ来るのか」と、主イエスに尋ねたのが始まりです。

彼らは、メシア（ギリシャ語ではキリスト）の到来を堅く信じ、その時には、今は、ローマ帝国の支配下にあるユダヤは解放され、悲願の独立を果たし、それに留まらず、ユダヤは、ダビデ王、ソロモン王の時代にも勝る、世界に冠たる光り輝く国となる、と、大いなる希望を抱いていたのです。ところが、主イエスは、彼らの問いに対して、こう答えられました。「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と。国と言えば、私たちは、どうしても、領土のことを考えます。でも、この時代、国と国の境界線は曖昧で、王の支配が及ぶ範囲を、大まかに領土と見做したのです。だから、聖書で“国”と言えば、“支配”と捉えた方が、正しく理解されるのです。と言う訳で、主イエスが“神の国”と言われる場合も、神の国とは、神の支配、もっと丁寧に言えば、愛による神の御支配、それが及ぶ所、それが及ぶ限り、それを神の国と言ったのです。だから、外からは見えないのです。それに続けて、主イエスは、「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と言われました。“間に”と訳されている原語は、“エントス”と言うギリシャ語で、本来は“中に”（英語のウイズイン）と言う場所を示す副詞で、そのため、神の国は私たちの心の中にある、と解釈され、信仰は、個人的、精神的なものだとして、一切社会性を廃し、徹底的に内的なもの、と、理解された時代がありました。でも、それは、主イエスの真意の誤解でした。主イエスは、ルカによる福音書１１章２０節で、「わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ」と言われました。主イエスがいます所、主イエスを通し神の救いの御業が行われるところ、実に、そこにこそ、神の国はある、神の支配は届いている、と、そう言われたのです。神の国は、実に、キリストがいますならば、何処でだって、そこが神の国になるのです。だから、「ここにある」「あそこにある」とは、外から見ただけでは、分からないし、簡単に、そんなことは言えないのですが、でも、真実、キリストが共にいてくださるならば、「ここ」だって、また、「あそこ」だって、神の国となり得るのです。

と言う訳で、主イエス・キリストの到来によって、神の国は、既に開始されたのです。でも、それは飽く迄も開始であって、完成ではありません。キリスト者は、その事実を知っていて、その完成を待っているのですが、完成するまでは、この世に生きながら、既に、国籍を天に移している者として、言わば、この世と彼（か）の世に、二つの国籍を持つ、二重国籍者として生きるのです。でも、どちらが本国かと言えば、この世ではなく、彼の

世なのです。この世にあっては、寧ろ、寄留者であり、旅人であって、天の国から暫し送り出され、天の国の消息を伝える務めを負った、言わば、メッセンジャーでもあるのです。

そこで主イエスは、神の国の完成を待つ者として、弟子たちに、幾つかの警告を与えられました。①先ず、第一の警告は、２２、２３節です。こうあります。「『あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。またその人々の後を追いかけてもいけない」。人の子の日とは、主イエスは、御自身のことを、人の子と言われましたが、それから明らかなように、主イエス・キリストの再臨の日を指します。それは、世の終わりの日でもあり、神の国の完成の日でもあります。その日が中々やって来ないので、待ちくたびれるか、世が混沌としてお先真っ暗になる時、人々は、その日が一日も早く到来することを渇望し、少しでも、その兆しはないものか、あればぜひ見たいものと、やたらせつき、あちこち駆けずり回る時が来るであろう。その機を狙い、必ず偽メシアが現れ、人々を惑わし、その気にさせ、煽り立て、哀れにも、その偽メシアを信じた者たちが、その後を追い回すだろうが、そんな者たちの言葉を信じ、尻馬に乗っかって、彼らの後を追いかけてはいけない、と、主イエスは、そう警告されるのです。昔も、今も、このような偽メシアは後を絶ちませんし、それを信しんじ、一度限りの尊い人生を棒に振る憐れな人々も後を絶ちません。でも、あなたたちはそうあってはいけない、と、弟子たちに強く、強く警告されるのです。何故なら、偽メシアは、途轍もなく悪知恵に長け、しかも、底抜けに貪欲であり、欲を満たすためには驚く程勤勉であり、並みの知恵では、中々太刀打ちできないからです。

②第二の警告は、２４節で、こう述べられます。「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである」と。キリストの再臨は、「稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように」起こるのであって、密かに、隠された形で起こることはなく、誰の目にも、そこがどこであろうと、はっきりと、それと分かる形で、起こる、と言われるのです。「見よ、あそこだ」「見よ、ここだ」と、誰かに言ってもらわなければ、気付かない、そんなローカルな出来事ではないのです。それは、世界大的な出来事であって、世界の誰もが、他の誰に言われなくても、認めざるを得ない、世界的、否、宇宙的事件なのです。しかも、それは、稲妻の如く、一瞬に片の付く事件で、何時始まり何時終わるか分からないような、のんべんだらりとした、締まりのない、間延びした出来事とは、程遠いものなのです。だから、その現れが、これとは違っていれば、それは全部インチキなのです。

③第三の警告は、２５節で、ここでは、こう述べられます。「しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている」と。キリスト再臨のことが、先ず、先に述べられましたが、キリストの再臨には、何よりもキリストの受難が、その極まった姿が十字架なのですが、それが先立って起こらねばならない、と、そう言われるのです。キリストの再臨は、キリストの十字架が完成される時であって、キリストの再臨に当たっては、十字架のキリストとは別人が、或いは、あの時とは豹変して、登場されるのではないのです。まるで十字架がなかったかのように、つまり、罪の赦しは、最早効力を失ったかのように、再臨のキリストは、恐るべき裁判官として登場し、小さな罪のあら捜しをして、容赦なく、裁きの剣を振り回し、切って、切って、切りまくる、と言うようなことは、決してなさらない、と言うことなのです。再臨のキリストは、十字架のキリストと、寸分違わず同じお方で、罪の赦しを、御自身の再臨に於いて、完成させられるのです。だから、キリストの再臨は、どこまでも希望であり、喜びであって、熱い期

待を抱いて、待ち望まれるべきものなのです。

④第四の警告は、２６節以下で、そこでは、旧約聖書の故事を引いて、こう述べられます。「ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。ロトの時代にも同じようなことが起こった。･･･人の子が現れる日にも、同じことが起こる」と。ノアの箱舟の話は、創世記６章から８章に亘って詳しく述べられています。世界に悪が満ち、神は世界を造ったことを後悔され、正しい人ノアとその一族のみを残し、洪水をもって、世界を一新しようと、神は先ず、ノアに箱舟を造ることをお命じになりました。ノアは神の言葉を信じ、せっせと箱舟造りに励みます。人々は、そんなノアを馬鹿にして、洪水など、それがなんだと高を括り、いよいよ日常生活に埋没して行きます。でも、神の言葉に間違いはなく、その日は遂にやって来ました。神の言葉を信じ、その日のために箱舟を備えていたノアとその一族は助かりましたが、神の言葉をあざ笑い、相変わらず日常生活に埋没し切って過ごしていた者たちは、皆、滅んで逝きました。同じようなことが、キリストの再臨の時にも起こるだろう、と、主イエスは言われるのです。日常生活への埋没とは言っても、「食べ、飲み、めとり、嫁ぎ」と言うことで、本来悪いものは一つもありません。寧ろ、良いことばかりです。しかし、だからこそ、幾らでも言い訳が効くのです。そこに落とし穴があるのです。日本キリスト教会信仰の告白の前文の最後で、私たちは、「終わりの日に備えつつ、主が来られるのを待ち望みます」と、繰り返し告白しています。でも、果たして、本当に、“備えしつつ”待ち望んでいるでしょうか。一番の障害は、ノアの時代と同じように、日常性への埋没です。お互い注意をいたしたく思います。

⑤第五の警告は３１節以下で、ここではこう述べられます。「その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。ロトの妻のことを思い出しなさい。自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである」と。「命あっての物種」と言われます。物にしがみついて、助かる命を、みすみす失う、と言うことは、実際しばしば起こることです。本末転倒ですが、笑えない人間の現実です。ポンペイは、ベスヴィオ火山の大爆発で火山灰に埋もれ、廃墟となり、やっと１８００年後に発掘されて、今は博物館のようになって、当時のまま石膏で固められ、展示されていますが、その中に、宝石箱を抱えたり、金袋を握ったまま倒れている人が見掛けられます。そのまま逃げておれば助かったものを、宝石や金が惜しくて、家に、取りに帰ったばっかりに、逃げ遅れて、死んでしまったのかも知れません。彼らは、宝石やお金を、自分の命よりも大切に思い、だから、それらは彼らにとっては命そのものであって、これを守るために、本当の命を失ってしまったのです。何が大切か、危機に際しては、それが問われるのです。いざと言う時に、間違いのない判断と、正しい選択が出来るように、日頃より修練を積み、それを心と体に、染み込ませておかねばなりません。

⑥最後に、第六の警告として、３４、３５節では、こう述べられます。「言っておくが、その夜、一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。二人の女が一緒に臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される」と。誰が天に国籍を持った者であるのか、外からは誰にも分かりません。寝室を共にしている者同士だって、一緒に一つの臼をひいている者同志だって、まさか自分の目の前にいる、日頃から馴染んでいる、特別どうと言うこともない相手が、これまで、ついぞ、それだとは気付かなかったとしても、その時には、つまり、キリストの再臨の時、神の国が実現する

時には、それが、目の前で、明らかにされる、と言うのです。彼、或いは、彼女が、どこに連れて行かれるのか、と言うと、本来、彼らの国籍がある天へ、即ち、神の御国へ、と言うことです。神の国は完成したのですから、最早、二重国籍は必要でなく、メッセンジャーの務めも、不要となるのです。

ここまで主イエスが話された時、弟子たちは、「主よ、それはどこで起こるのですか」と、尋ねました。それに対して主イエスは、「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ」と、謎のような言葉を吐かれました。しかし、この言葉は、主イエスのオリジナルの言葉ではなく、当時、広く民間に流布していた格言であって、主イエスはそれを、ここで借用されたのだ、と、そう考えられているのですが、では、それをもって主イエスは、何を言わんとされたのでしょうか。一つは、鋭い視覚によるものなのか、並外れた嗅覚によるものなのか、禿鷹は、死骸があると、直に気づき、素早く飛んで来て、必ず啄（ついば）みます。その“必ず”、と言う必然性が、キリスト再臨にも当て嵌まる、と考えられたのかも知れません。或いは、禿鷹が集まって来るのは、どこからでも見えます。それがキリスト再臨に当たっても、当て嵌まる、と考えられたのかも知れません。それにしても、わざわざ、それだけのことを言うために、こんな格言を引用する必要があったのか、やっぱり、疑問が残ります。この格言には、どこか審判か、滅びを連想させる雰囲気があります。確かに、キリストの再臨には、最後の審判が続くのですから、審判と無縁ではありません。でも、これによって、完全にあらゆる人間の罪が、この世の悪が、積り積もった世界のあらゆる不義、不正が、裁かれ、全き世界が新しく始まるのですから、それは、忌まわしいどころか、喜ばしいことなのです。キリストの十字架が罪の赦しを保証したように、キリストの再臨、それに続く最後の審判も亦、喜び以外の何物でもないのです。

以上述べて来た、これが、主イエス・キリストのお約束なのですから、私たち、どんなに厳しい現実に出会っても、決して望みを失わず、最後はキリストが最良、最善に締め括ってくださることを固く信じて、この人生、歩み通したいと思います。

（三輪恭嗣）